

武藤勝彦氏を悼む

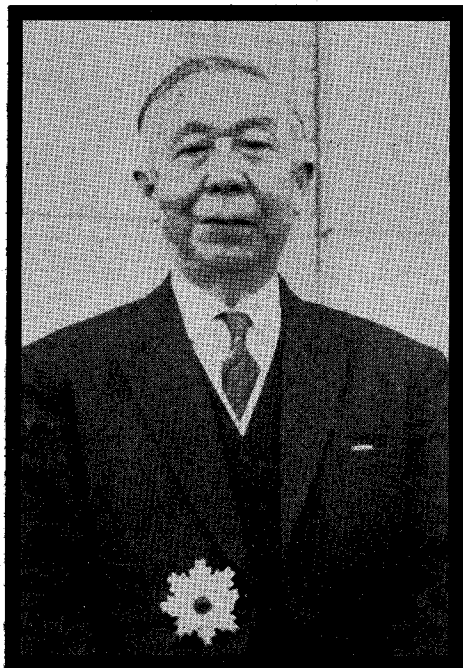
弔 辞

日本天文学会特別会員武藤勝彦氏は長らく建設省
国土地理院々長として測地学天文学の研究を指導され、
我国におけるこれらの分野の進展に多大の貢献を
されました。その上昭和27年から10年間の長期
にわたって日本天文学会評議員として本会の発展に
御尽力下さいました。このたび突然御逝去の報に接
して誠に痛恨の思いに堪えません。ここに本会を代
表して謹んで哀悼の意を表します。

昭和41年8月20日

社団法人日本天文学会理事長

広瀬秀雄



武藤勝彦氏を偲ぶ

坪川家恒*

元国土地理院長武藤勝彦博士は去る8月16日71才の生涯を終えられた。同博士は東京帝国大学理学部物理学科を卒えられ、しばらく山形高等学校教授として教鞭を取られた後、大正12年当時の陸軍陸地測量部に入られた。以来、昭和36年国土地理院長を退かれる迄社会生活の殆んどを国家的測量事業の推進および測地学の発展に捧げられたのである。

明治初期に測量事業が内務省から陸軍に移管されて、広域の測量と基本図の作製は軍だけの所管となった。しかしながら新興の意気旺盛な軍は少壮の軍人、技術者をヨーロッパ、主としてドイツに派遣して技術を習得させ、その直輸入の方法を良く活用し、30年前後の短期間に一等三角測量より開始した基準点網から5万分の1地形図を日本内地についてはほぼ完成したのである。殆んど人跡未踏の地域をも含むと思われる当時の国土をこのような短期間に正確に図化したことは誠に驚くべきことである。しかしながら、その反面ヨーロッパで多年にわたり発展させて来た技術の成果を直輸入しその利用にのみ邁進したきらいがある。また、地球の形をはじめとする測地上の問題が物理学、数学の第一級のテーマとして

論議された時代も漸く過ぎつつあった事情のためであらうか、広域測量の背景をなす測地学の導入は等閑視され、ついに我が国では大学に測地学本来の講座は開設されることがなかった。

武藤博士が陸地測量部に入られるころは漸く内国の地図が完成し一息つくと共に、今後の測地事業を如何に進めるかについて考え始めて来たころであろうと思う。軍人達も軍用図の調製だけに飽き足らず、その学問的裏付けの必要を感じ始めていたようである。国際会議としては最も古い国際測地学会には、毎回出席していた当時の陸地測量部長は特にそれを痛感させられたことと思う。筆者は博士の入部当時の事情の詳細について御本人からお聞きすることはできなかったが、当時の測地測量部長の要請に対し長岡、寺田教授の推薦によるものようである。測地測量は当時新しい学問として登場して来た地球物理学に対しても、特に必要であることを知られていた教授らが、軍人の管理下にある職域に卒業生を送るに当ってはかなり考慮を払われたことと思う。パイオニア的精神に富む有為の学徒であると共に、融和的人格を持たねばならないであろう。この点を考えると武藤博士の人選に当たった教授の明に敬服すると共に、この方面に関係する者として深く感謝するのである。

* 東大地震研究所

同一の経歴を持った先輩、同輩を持たない博士は文字通りパイオニアとして測地学的テーマに取り組みられたようである。平均潮位の解析、水準測量の閉合差と重力異常との関係等の研究は我が国における近代測地学的テーマのさきがけをなすものである。これらの問題は今日に至るまで解明されていない。水準測量を実際に作業し結果を整理して地塊（ブロック）運動に最初に気が付かれている。当時の測地網は単一原点系であったが、測地天文測量の進展と共にラプラス条件を導入した多原点系に組み変えることも考えられていたが、老大な計算量を伴うため完成には至らなかった。アストロラーベあるいは重力振子の開発も考えられた。重力振子用の熔融水晶棒は終戦後成形され、全装置が GSI 型重力振子装置として完成され現在も活躍している。地形測量特に写真測量の導入に対しても陰に陽にその発展を援けておられた。このようにして陸地測量部に於ける技術の支柱は殆んど博士によって支えられていたのであるが、職業軍人によって管理されている軍官庁で、研究的な仕事をおこなうには仲々困難で気づまりなことも多かったようである。豪放闊達で物にこだわらない反面、細心熟慮され、又人と良く融和される性格の博士は陸測解体に至る迄、研究者および技術者と軍人との間の調停役でもあったのである。又、好学の軍人とは研究者としても人間としても親交があり、我が国のゼオイドを最初に手がけた熱海中佐の令妹が現在の夫人であることもこのことを示していると思われる。

外部の大学或いは研究所と陸地測量部の結び付きは殆んど博士を仲介としておこなわれていた。地殻変動の研究には測地測量の成果が不可欠であるが、研究者の要請に応じて資料を提供し、更に委託測量もお世話され、この方面の我が国の研究を世界的にした功績はきわめて大きい。陸地測量部は軍官庁としては大学と最も結びつきが大きい所ではなかったかと思う。したがって当時の博士の部屋には訪ねて来られる研究者が絶えなかった。大学卒業後、短期現役技術将校として陸地測量部付きを命ぜられ、博士の部屋に配属された筆者はここで多くの先生方に紹介されると共に、軍務に服しつつ研究的空気に接することができた。

昭和20年、終戦と共に軍が解体され、陸地測量部が内務省に移管され、測地業務が公共的性格のものに移行した時に、その最高責任者としての博士を持つことができたのは、我が国の関係方面にとっては望外の幸運であった。それだけに管理能力を持つ軍人を失い、いわばこの面では素人の技術者の集団から、まとまった官庁を作り上げるには誠に苦勞をされたこととおもう。主管省は内務省から建設省へと移管したが、何れにしてもこの方面との行政的折衝には経験を持たれなかったし、その上占

領軍との交渉もあった。米軍にとって地図は不可欠のものであるから、絶えず要求があり、時には無責任なものも少くなかった。これらに対し博士が毅然たる態度で処せられていた。

陸地測量部時代においても研究的色彩はあったといえ、極めて貧弱であった。戦後努めて人材の導入に意をそそがれ、その研究意欲の高揚にも特に努められた。研究面における陸測的空氣を除去される意図か、「どの方面の研究でも結構だ。生物学をやられても困るがね」と極論されていたことを思い出す。ただ筆者らも含めて、能力、努力も不足のまま、博士の御意図ほどには研究が進展していないのは残念である。

博士はかなり多趣味であった。狩猟は学生時代からやっておられたようで、クレイ射撃の腕前については時々御自慢を聞かされた。筆者が実際に鉄砲を撃たれるのを目のあたり見たのは伊豆下田にお伴した時だけである。散々歩いた末、彼方の排水土管から顔を出した「いたち」に一発放たれた。しかし彼の方は一向に意に介せず、次ぎの一発で漸く退却を始めて行った。その後さっぱり鳥影を見ずじまいだったので、技倆の程を筆者は測ることができない。釣も又、お得意のようである。黒鯛、鮎釣の技術と収穫についても大分講義をお聞きした。鳥取県の作業視察の折、かって陸測時代一等三角測量作業の際大いに黒鯛を釣られたという海岸にお供したことがある。釣マニアの当時の総務部長と早朝3時頃土地の漁師に案内させて旅館を出発して行かれた。朝寝坊の筆者はこれは失礼して8時頃漸く現地に行つて仲間入りさせて頂いた。御両名共、収穫習無で約5時間の差が全然ない。その後夕方迄に、大物に終始した博士の黒鯛1匹、小物に徹した筆者の「かわはぎ」10数匹が戦果であった。以来、鉄砲、釣の時にその話を持ち出すと、博士は呵々大笑されるのが常であった。又人と談笑されるのがお好きであった。幼少のころ酒が好きでこっそり飲んだ所を家人にたしなめられたが、存命中の御祖母が「大酒飲みにさせないためには、今の中に存分に飲ませて置いたが良からう」といわれ、好い気で飲んでいる中にひっくり返りひどく苦しんで以来、駄目になった由である。盃に2、3杯ですっかり赤くなられたが、酒の席での談義はお好きで、このような席には多くの場合酒客と共に最後迄居られることが多かった。稲毛の地理調査所時代に検見川の東大ゴルフ場ができたが、談たままゴルフに及ぶと「あんなものをやる奴は虫が好かない」とき下して居られた。役所が東京に来てから、ゴルフ好きの総務部長が来られて、先ず当時測地部長であった現在の水沢緯度観測所、奥田所長が陥落された。次ぎに小生が一人も練習用道具を買わされた。両名で院長室にお伺いして「ゴルフ」を始めることにした旨申上げると、「フン」

と云って居られたが、いささか着きがなくなった様な感じであった。その後、何日かして舶来のゴルフ道具の自慢をいくさり聞いた。米国支店勤務から帰られた奥様の御令弟から巻き上げられたものである。以来、院長室に入るには中の気はいを伺ってから入る必要を感じた。手頃な檜の棒でスイングの練習をして居られることがあるからである。博士のゴルフはその御性格を反映する様に豪快であった。球の方向については必ずしも定かではないが、一度当れば、誠に気持ちよく飛んだ。怠け者の小生は何時の間にかゴルフから遠去ってしまったが、その後時々お伴した測量協会の理事長の話によると、この1,2年小水がお近くなって、見えなくなったと思うと木立から出て来られることが多かったという。癌と云う不治の病

魔が、その頃から健康で快活な博士を侵かし始めたのだろうかと思われ、暗然とする。しかしこの5月入院される直前迄、ゴルフを楽しまれ、退院後のゴルフを期待され、「今度はお前も又始めろよ」といわれていたのを想い出すと何か救われたような気にもなるのである。

戦後の測地測量の技術的發展、特に人工衛星の利用等により測地学の第2の進展が期待される折、博士を失うのは誠に残念である。あの人情味ある活達な偉軀に永遠に接することができない淋しさが身に沁みるのは筆者のみではないであろう。測地学がは冤も角、学者達にも充分に理解されていない日本に於いて、測地事業の火を消さないで今日迄守り育てて来られた博士の功績は評価し過ぎることができない。御冥福をお祈りすると共に、日本における測地学の發展を期待したいと思う。

武藤勝彦氏略歴

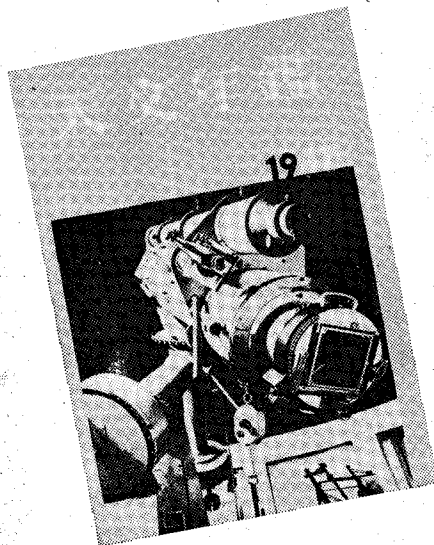
明治28年2月7日 埼玉県本庄市にて出生
 大正11年 東京帝国大学理学部物理学科卒業
 山形高等学校教授
 大正14年 陸地測量師
 昭和9年 満州国へ出張（新京基線測量及増大観測）
 昭和13年 理学博士
 昭和16年 陸軍技師
 昭和20年 地理調査所長
 昭和25年 測量審議会委員
 昭和26年 国土調査審議会委員
 昭和28年 日本学術会議委員

昭和35年 宇宙開発審議会委員
 昭和35年 国土地理院長
 昭和36年 国土地理院長辞職
 日本道路公団顧問
 昭和40年 勲二等旭日重光章を授与される
 日本測量協会顧問
 昭和41年 日本測量協会会長
 昭和41年8月16日 死去 71才
 なお天文学、地球物理学研究連絡委員会委員としても活躍され、また国際会議出席等のため数回の海外出張をされました。

天体観測のバイブル 「天文年鑑」1967年版が 大好評 発売中です

お近くの書店どうぞ——

■1967年の毎日の天文現象の予報、惑星や月・太陽の出没時刻、日・月食や星食、小惑星・彗星・流星・変光星の予報、水・金・火・木・土・天・海・冥王星などの1年間の動き、太陽の月面余経度・月面緯度の毎日の値、さらに新しく主な星雲・星団の表や恒星表、隕石・ユリウス日・JJY報時の項目をふやしたもので、初心者から高度のアマチュアまで、天体観測者になくしてはならない、便利な定評のある年鑑です



B 6判 124ページ（増ページ）

定価 250円